

卒業論文  
憩いの場として  
地域の拠点になる公園の一考察

橋本祥希 21211272yh@tama.ac.jp

## 1. 研究の動機・目的

大学生になって散歩をするのが趣味になり、子どもの頃よく遊んだ近隣公園を含め公園内を散策している。私自身、幼少期に公園をよく利用して遊んでいたため、久々に訪れることによって懐かしく思い精神的な安らぎを得ることがある。災害時は地域の拠点となる公園でもあるが、近年は、日常的に公園の利用者が減少しているのではないかと感じている。

本研究を通じて、子どもから大人まで近隣住民が利用するようになる公園、人が集い、日常的な交流が生まれ、地域の拠点になる公園とはどのようなものなのか、今後公園はどのような役割を担っていくべきかを考察するものである。

## 2. 都市公園の分類

都市公園は、住民の利用に供する身近なものから広域的な利用に供するものまで、様々な規模、種類のものがあり、その機能、目的、利用対象等によって10種類ある。今回の研究の対象にするのは「近隣公園」である。

※近隣公園とは、主として近隣に居住する者の利用に供することを目的とする公園で、近隣住区当り1ヶ所を誘致距離500mの範囲内で1ヶ所当り面積2haを標準として配置されている公園のことである。

## 3. 事例の紹介

近年、地方自治体の財政状況の悪化、自助・共助・公助の視点などから、身近な環境を地

域住民で管理する取り組みが進められている。ただ管理するだけでなく、活動を通じて人と人とのつながりを築き、公園に人が集まり様々なコミュニティを実施している。その取り組みをしている公園を調べることで本研究の目的につながる公園のデザイン（仕組みづくり）を見出せると思い、実際に先駆的な取り組みを行っている公園を調べた。

事例1 有馬富士公園（兵庫県 三田市）

園内で様々なコミュニティがプログラムを提供しており、キャストとゲスト、両者が公園利用者となる公園

事例2 舞岡公園（神奈川県 横浜市）

日本のかつての風景を残し、市民に広く田園体験の場を提供しており、「市民と行政の合作」という形が確立している公園

## 4. 考察

事例で紹介した2件の公園は、共に市民が必要としている事を明確に提示してからデザインされた公園である。2つの公園を比べてみて、「プログラムを提供するキャストの存在」「地域に住む「市民」の思いの強さ」「自然や季節感を活かした公園」「管理者と利用者の関係が密接であること」の4つの共通点があると感じた。また、項目の1つである公園の管理者と利用者が密接な関係になることで、管理者が利用者に求めること、利用者が公園に求めることを言いやすい環境が出来、市民の求める、地域の拠点となる公園への第1歩になるのではないかと感じた。

〔参考文献・引用文献〕

- 1) 山崎亮『コミュニティデザイン』学芸出版社、2011年
- 2) 浅羽良和『里山公園と「市民の森」づくりの物語』はる書房、2003年